

## 実践報告「英語での発話」を促すために（その3）

キーワード：英語での発話/協同学習/口頭練習

堀内 ちとせ

### 1. はじめに

日本人の「英語能力(特に「英語を使う」力)」の向上が叫ばれ始めて久しい。東京オリンピック開催決定から早くも5年が経過し、小学3年生からの「英語教育」導入も目前に迫っている。現在、考案中の「大学入学共通テスト」の「外国語」のテストにおいては、4技能に焦点が当てられることが検討されている。そんな中、数年前より、「英語を使える(特に「発話できる」)ようになる」ことに焦点を当てた「英語の授業」を行い、報告を続けている。本稿はその続編である。

前回の試みでは、授業内に学生たちが英語を使って表現できる機会を増やすために、「30秒Talk」と「English Only Time」という2つの活動を、授業内に採り入れてみた。その結果、2017年度前期の試みでは、前年の2016年の試みと比べ、「英語が口から出やすくなってきた」と答える学生の割合を大きく伸ばすことができた(堀内, 2017)。

今回は、数年前から実施している、「つぶやき」練習、「リズム」練習という、英語の口頭練習の方法に焦点を当てて見ていくことにする。医療系大学の2018年度1学年242名を対象とする、「アンケート調査」をもとに検討する。

### 2. 「今回の試み」について

#### 2.0 「英語の発話」を促す授業内での口頭練習について

「文法・英作が苦手」だから、「英語を話すのも苦手」という学生を目にすることがある。「英語を話す(英語で発話する)」場合、確かに文法や英作ができた方が有利であるのかもしれない。ただ、実際問題として、英語を発すべき瞬間に、文法を考えながら一から英文を組み立てていたとしたら、どうであろう。話すべき瞬間に、とっさに英語が口から出てくるためには、どのような状況に、どのような英語表現で対応すべきかが頭にしっかりインプットされており、即座にアウトプットできる状態でスタンバイされている必要があるのではないだろうか。そのためには、しかるべき時の、しかるべき英語表現を1つでも多く覚えて、いつでもスタンバイさせている必要があるのではないかというコンセプトのもと、授業を行っている。

そこで、授業では数年前より、「ドラマの教科書」を用い、ドラマで使われている、日常的に使える

うな「英語表現」を中心に口頭練習を実施している。また、ドラマの教科書のみならず、「健康科学系の教科書」の方でも、覚えておくべき表現などでは、同じ練習方法で口頭練習を行っている。今回は、「つぶやき」練習と「リズム」練習という口頭練習に焦点を当てて見ていきたい。

## 2.1 「つぶやき」練習について

「つぶやき」練習というのは、世間で言う、いわゆる「通訳訓練」の一つである「シャドーイング」と言っても良い練習法である。ただ、「シャドウ(影)」には、「影」という消極的な響きがある。できることなら「影」ではなく、「自らの意思」で積極的に「つぶやき」たい。このコンセプトが、「つぶやき」練習という命名につながった。

それはさておき、「つぶやき」練習というのは、英語が聞こえたら、とにかく「つぶやく」といった練習方法である。英文は見ない状態で聞こえた音声だけを頼りに、「意味」を考えながら「つぶやく」のがポイントである。英語を聞き取るのが苦手で、耳に入ってくる英語を全て「聞き取る」のは不可能な場合でも、自分なりに聞き取れた単語を、とにかく「つぶやく」というのが鉄則である。

この「つぶやき」練習を思いついたのは、通訳訓練(筆者は一度も習ったことはない)からではなく、TOEICの監督がきっかけであった。ある時、Listeningセッションの約45分の間、手持無沙汰の余り、聞こえてくる英語を片端から心の中で「つぶやき」ながら、監督をしていたことがあった。そんな折り、何気なく「つぶやいていた」英語が、いつもよりも頭に残っているような印象を受けた。そこで、別の日に、出勤途中ラジオから流れてくる日本語のニュースを、試しに「つぶやき」ながら聞いてみた。朝、聞いたはずのニュースの内容を夕方覚えていないのが常であったが、「つぶやく」ということだけで、かなり記憶が定着しているという事実には驚いた。耳に入ってくる英語を(頭の中であっても)「つぶやく」だけで、「記憶する」という別の行為に一役買ってくれるかもしれない。それが、「つぶやき」練習の始まりである。

そのような筆者自身の経験より、ここ数年、ドラマの「英語表現」を練習する際、この「つぶやき」効果(!?)を採り入れて実践することになっている。段取りは、次の通りである。

学生たちは、まず、覚えるべき英語表現をネイティブ・レベルの速度で3回ほど聞く。その際、画面に映し出された「日本語での内容」は見ても良いこととする。英語を聞いて即座に理解できなくても、「内容」を意識して英語表現を聞くためである。

授業は、学生の授業への参加を少しでも促すために、「協同学習(小グループで互いに助け合いながら学習を進めていくグループ学習の1つ)」の考え方にに基づき、3人、あるいは4人の小グループを中心に展開させている。ここで、流れてくる音声から聴きとれた英語は、他のメンバーにも聞こえるように声を出して「つぶやく」ように呼びかける。流れてくる英語は聞き取れなくても、メンバーの英語であれば、何とか聞き取り「つぶやく」ことのできる学生がいるかもしれないからである。受験期を終えた学生たちの中には、英語を耳にした途端に「書く」癖がついてしまっている学生も多い。聞こえた英語をすぐ書き出してしまふ学生に対しては、心の中でも、とにかく必ずつぶやいてから、「書

き出す」ように呼びかけた。

「書き出し」後、「英語表現」を文字情報で確認させたあとは、学生たちは、表現全体を何度も口に出し口頭練習する。その際、少しでも多くの学生に声を出して練習してもらうために、ttsreader というアンドロイドによる音声リーダーの“very slow”の速度を使用した。

この音声リーダーには日本語版(<https://ttsreader.com/jp/>)と、英語版(<https://ttsreader.com/>)があり、同じURLをPCで開いた場合とタブレットで開いた場合との仕様が異なっている。英語版の方では(PCでもタブレットでも)、音声速度を6段階に(日本語版では3段階)変えることができる(図1～図4参照)。

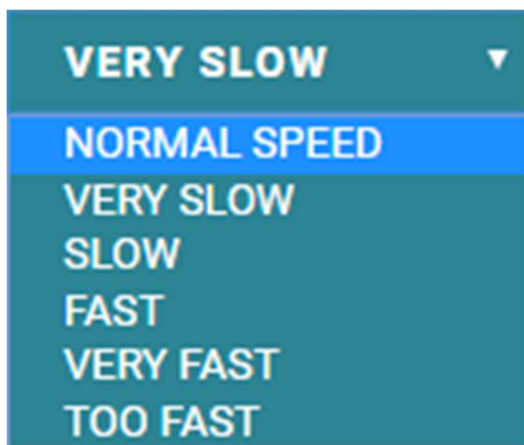


図1 PC 英語版(速度表示)

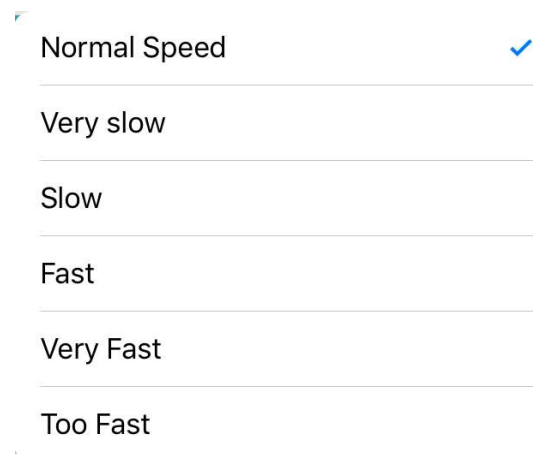


図2 タブレット英語版(速度表示)

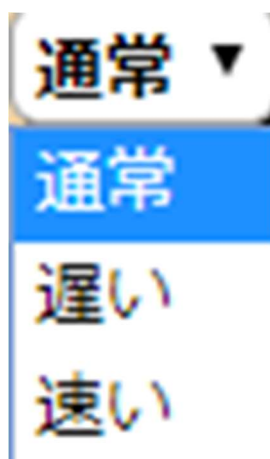


図3 PC 日本語版(速度表示)

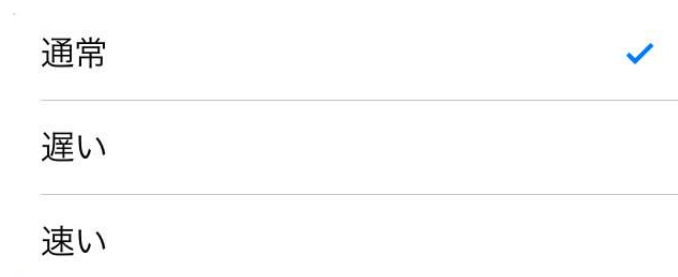


図4 タブレット日本語版(速度表示)

また、英語版の方が音声の種類も多い。PCで英語版を開いた場合には英米それぞれ2種類ずつの4種類余りであるが、タブレットの場合は、英米でも何種類かの音声が可能以上に、オーストラリア、アイルランド等、多国の英語でも再生が可能(日本語版では、英語の授業で使えそうなものは英米2種類のみ)である(図5～図8参照)。



図5 PC 英語版(音声表示)

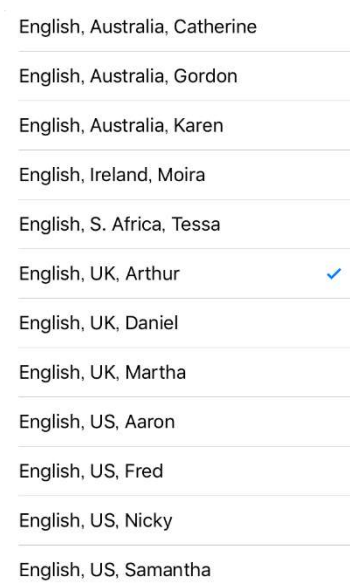


図6 タブレット英語版(音声表示)



図7 PC 日本語版(音声表示)

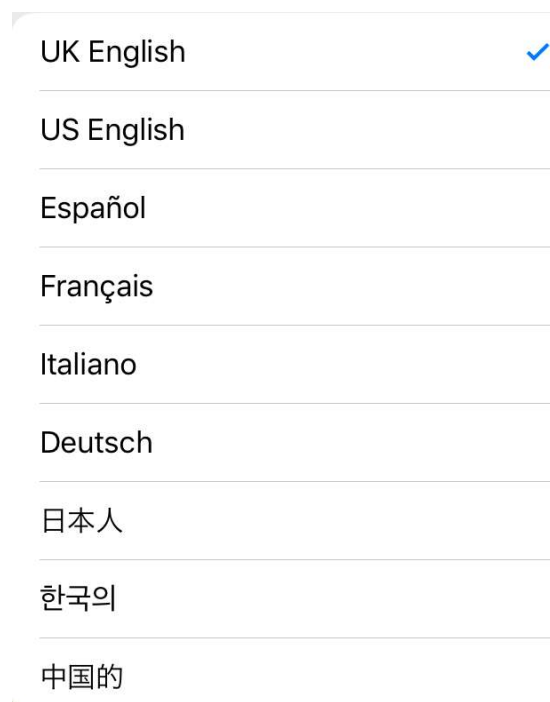


図8 タブレット日本語版(音声表示)

学生たちの口頭練習には、この音声リーダーの英語版の“very slow”の速度を使用した。これであれば比較的ゆっくりなので、日本人でも英語がつぶやきやすくなる。ちなみに、「つぶやき」練習の最初に英語を聞いて「つぶやく」折りには、“normal”の速度を使用した。学生たちは、音声リーダーの“very slow”の音声を用いて英語を見ながら「つぶやき」、文字を見ずに「つぶやき」、つぶやいたら「書き出し」、最終的には、「日本語の内容」から目標の「英語表現」が瞬時に口からスムーズに出てくるレベルを目指すというのが、この活動の全体像である。

## 2.2 「リズム」練習について

「リズム」練習というのは、英語独特の「リズム」に焦点を置いた練習法である。「つぶやき」練習との大きな違いは、「つぶやき」練習が、耳に入ってくる英語に集中して、とにかく「つぶやく」というものであるのに対して、「リズム」練習の方では、英語独特の「リズム」にもう少し意識を向けた練習法であることである。具体的には、次のような段取りで進めていった。

まず、「日本語の内容」を見せながら、具体的に、どのような単語等が使われているかを推測させる(時間の関係で、この部分は割愛することもある)。ある程度、主要単語が出されたところで、覚えるべき「英語表現」全体を視覚情報として示し、具体的にどのように発音されるかを、まずは個人レベルで推測させる。その後、グループでそれぞれの意見を共有させ、自分たちなりの方法で、覚えるべき「英語表現」を実際に声に出し発音させる。その後、日本人教員が、「英語のリズム」を際立たせるため、少し大袈裟に「英語表現」を言って聞かせる。「意味の切れ目」ではなく、音の「つながり」と「切れ目」を意識し、拍(「リズム」)を取りながら声に出すというのが、「リズム」練習のポイントである。

この「リズム」練習を使うと、“Let’s just go get a little fresh air, Okay?”(『Modern Family』, P.66) や “Pediatric wards provide treatment to patients with cancer and blood disorders.”(『Healthy English』, L.11 P.10)のような、少々長めの表現(文)であっても、日本人でも言いやすく、覚えやすくなる。例えば、最初の表現であれば、“Let’s just go get a little fresh air, Okay?”というように、下線がついたところで拍(リズム)を取り、「レッス・ジャスッ・ゴウ・ゲラ・レロフレッシュ・エアオウ・クイ」のように発音する。

少々大袈裟に、英語のリズム(拍)の取り方を認識した後は、このリズムで何度か英語を口に出し、また、英語の表記を見ないでも言ってみて、言えたら書き出し、グループで確認し合いながら、表現を自分のものにしていくというのが「リズム」練習の全体である。

この「リズム」の効用に気づいたのは、帰国子女でもない、英会話を習っているわけでもない、普通の小学生が、“Could you tell me the way to the library?”という、少し長めの英語をスラスラ口にしてのを目にしたのがきっかけである。その小学生によれば、その英語を聞いたのはテレビかYouTubeの「お笑い」の動画だったとのこと。彼にしてみれば、単なる「クジュ・テウミダ・ウエイ・トウダ・ライブラライ?」という、独特の「リズム」を持った楽しい(!?)音の連続でしかなかったのかもしれないが、

それにしても、である。英語を口に出すのが苦手な日本人が、英語をスラスラ口にできるかもしれないコツは、ここにあるかもしれないと閃いた瞬間であった。

### 2.3 具体的な授業での「実施内容」について

12回、または15回(学科によりコマ数が異なっている)の授業全体の流れとして、最初の段階では「つぶやき」練習を行い、中盤から終盤では、「リズム」練習を主に行った。

「つぶやき」練習を最初の段階で行ったのは、最初はお手本となるものを耳にする機会が多い方が良いだろうと考えたためである。速度の速い英語は、頭の中で「つぶやく」ことが可能であっても、実際、声を出して「つぶやく」のは難しいことも多い。そこで、実際に口頭練習をする際には、学生たちが少しでも「つぶやき」やすいように、音声リーダーの再生速度を変えて実施した。また、音声リーダーを用いると再生回数の調整もでき、音声リーダーに合わせての練習では、練習回数の方も調整が可能である。

一方、授業全体の中盤以降に実施の「リズム」練習では、学生たちが「英語のリズム」を確認のため聞くことはあっても、ネイティブ・レベルの速度の速い英語を聞く機会は余りない。「リズム」練習とは、練習の最初の段階から、英語の「リズム(拍)」の取り方、それに伴う音のつながりや、聞こえなくなる音などを意識させ、「英語を実際に発する」ことに集中させた練習法だからである。ネイティブ・レベルの流暢な英語を聞いて、自ら「英語のリズム」の特徴を捉えるのは難しい学生も存在しているため、日本人教員による、少し誇張した形でのリズム文で口頭練習することになる。この練習法では、英語の「リズム(拍)」の取り方が体得できれば、音声リーダーの英語に頼ることなく、自ら何度でも口頭練習することができる。

### 3. 結果と考察

#### 3.0 「アンケート」について

2018年前期、最後の授業時に、2018年度1学年242名の対象学生全員にアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、安永(2012:125)に倣って「1・2・3・4・5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とてもそう思う」とした。

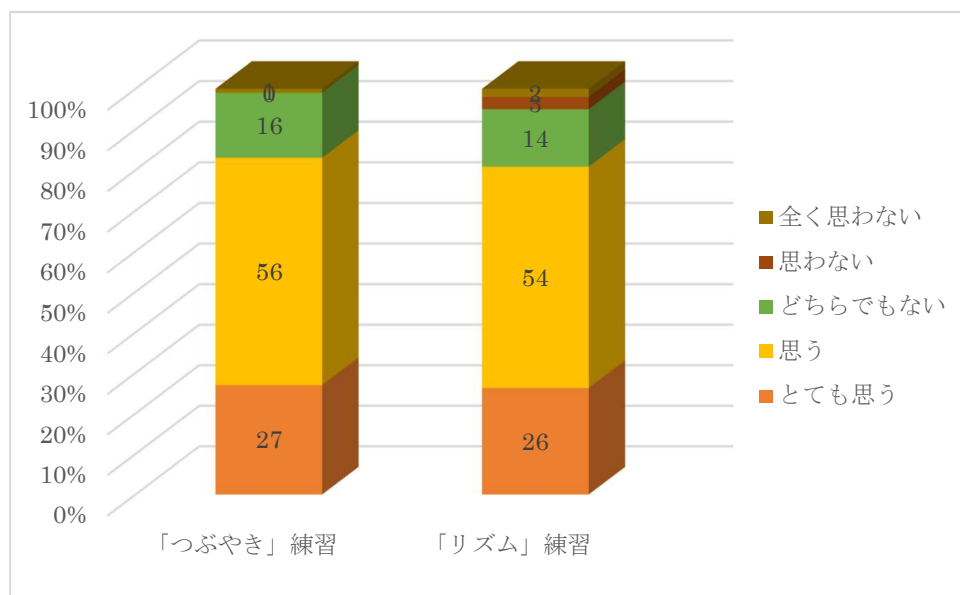
今回のアンケートで注目したいのは、「つぶやき」練習と「リズム」練習のそれぞれの場合において、「英語の表現を覚えられた」という項目と、「英語が口から出やすくなった」という項目の2項目についてである。「英語を発する(英語を口から出す)」ためには、基本、「表現の表現」を覚えている必要がある。今回は、上記の2項目について、比較検討してみたい。

今回は、どちらの練習法においても、「英語が記憶に残りやすい」のではないかと、記憶に残っていれば、その英語を口からも出しやすくなるのではないかと、筆者自身の小さな経験から着想を得た仮説の上での試みである(2.1、2.2参照)。その仮説が、学生たちに対しても成り立ちそうであれば、学生たちの「英語での発話力」促進にもつなげられるのではないかと。「つぶやき」効果と、「リズム」効果に期待したい。

### 3.1 「英語の表現を覚えられた」かについて

「英語を口から出す(英語での発話の)」ためには、そもそも、「英語表現」が頭に入っているかどうかが前提となる。そこで、まず、「つぶやき」練習と「リズム」練習により、「英語の表現が覚えられた」かどうかという項目について見てみたい。

図9 「英語の表現が覚えられた」(「つぶやき」練習 vs. 「リズム」練習)



Note. 「英語が覚えられた」という項目に対する、「つぶやき」練習(左側)と「リズム」練習(右側)の調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図9において、「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合をしてみると、「つぶやき」練習においても、「リズム」練習においても、ほぼ同じくらいの割合であり(それぞれ、 $27\% + 56\% = 83\%$ 、 $26\% + 54\% = 80\%$ )、その違いは僅か3%であった( $83\% > 80\%$ )。また、両者において、「思わない」・「全く思わない」と回答している学生の割合を比べてみると、「つぶやき」練習、「リズム」練習の順に、それぞれ、 $0\% + 1\% = 1\%$ 、 $3\% + 2\% = 5\%$ となり、「つぶやき」練習の方が僅かながら「英語の表現が覚えられた」という結果となった( $1\% < 5\%$ )。

「つぶやき」練習と「リズム」練習の平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみると、有意差が見られた( $t(241) = 2.49, p < .05$ )。同じく、優位水準1%の両側検定により検討してみると、有意差は見られなかった( $t(241) = 2.49, n.s.$ )。

2.2で、英語についてほとんど理解していない小学生が、長めの英文を覚えていた事例を紹介した。そのことから、ひよっとしたら、「リズム」練習の方が「つぶやき」練習よりも、「英語の表現が覚えられた」という学生の割合が多く見られるかもしれないという予想(期待)もあったが、今回の対象



学生たちに対しては、そのような結果とはならなかった。

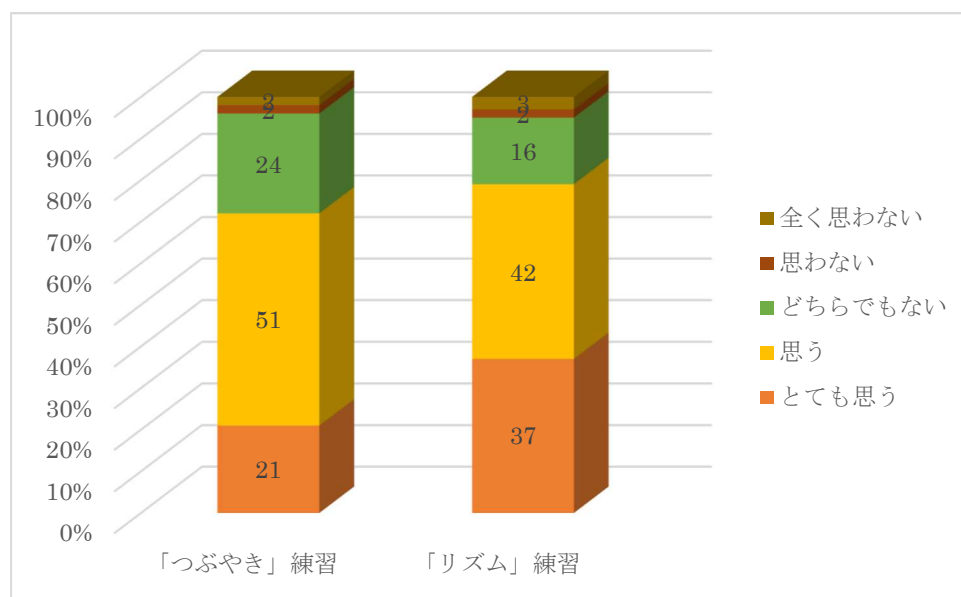
「リズム」練習には、「リズムを体感じて声に出す」という、学生によっては少々恥しいかもしれないという特徴がある。何でも柔軟に受け入れるのが難しい年頃である大学生にとっては、少なからず受け入れ難い練習方法であったということなのかもしれない。

ただ、**図9**を見れば、「リズム」練習は「つぶやき」練習と同様、多くの学生に対して効果がある練習法であることは、誰の目にも明らかであろう。

### 3.2 「英語が口から出やすくなった」かについて

次に、「英語での発話」、つまり、「英語が口から出やすくなった」かどうかという項目について、「つぶやき」練習と、「リズム」練習に対する調査結果を見ていきたい。

図 10 「英語が口から出やすくなった」(「つぶやき」練習 vs. 「リズム」練習)



Note. 「英語が口から出やすくなった」という項目に対する、「つぶやき」練習(左側)と「リズム」練習(右側)の調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図 10 が示すように、「リズム」練習における「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合を見ると、「つぶやき」練習における割合よりも多いことが分かる(それぞれ、 $37\% + 42\% = 79\%$ 、 $21\% + 51\% = 72\%$ )。特に、「リズム」練習においては、「とても思う」と答えている学生の割合が、「つぶやき」練習よりも高い( $37\% > 21\%$ )。「どちらでもない」と答える学生の割合を見ると、「つぶやき」練習よりも「リズム」練習の方が低い( $24\% > 16\%$ )。「つぶやき」練習よりも、「リズム」練習の方が、「口

から出やすくなった」と、迷わず答えられる学生が多く見られると言えそうである。

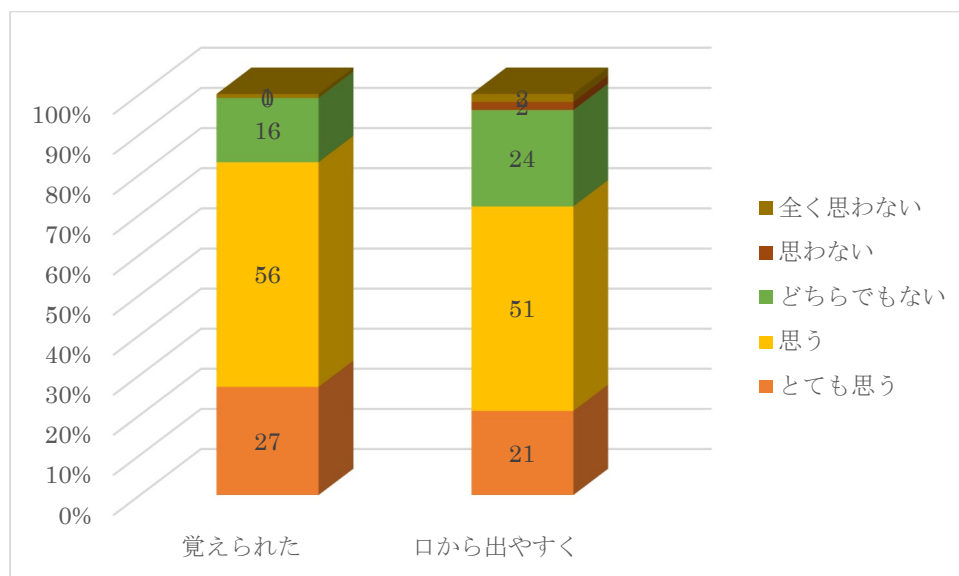
「つぶやき」練習と「リズム」練習の平均値の差を優位水準 5% の両側検定により検討してみると、有意差が見られた ( $t(241) = -6.26, p < .05$ )。同じく、優位水準 1% の両側検定で検討してみても、有意差が認められる結果となった ( $t(241) = -6.26, p < .01$ )。

「リズム」練習とは、そもそも、最初の段階から「口から発する」ことに焦点を当てた練習方法である (2.2 参照)。「英語を発する」ことが念頭に置かれている「リズム」練習において、「英語が口から出すやすくなった」と答える学生の割合が多く見られるのは、当然の結果と言えるだろう。

### 3.3 「つぶやき」練習について

今度は、「つぶやき」練習において、「英語の表現が覚えられた」という項目と「英語が口から出やすくなった」という2項目に対する調査結果を比べてみることにする。

図 11 「つぶやき」練習について(「覚えられた」vs. 「口から出やすくなった」)



Note. 「つぶやき」練習における、「英語の表現が覚えられた」という項目と、「英語が口から出やすくなった」という項目に対する調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸: パーセント)。

図 11 における「つぶやき」練習において、「とても思う」、「思う」と回答している学生の割合を見ると、「英語の表現が覚えられた」という項目の方が、「英語が口から出やすくなった」という項目よりも多く見られる(それぞれ、 $27\% + 56\% = 83\%$ 、 $21\% + 51\% = 72\%$ )。3.1において、「英語の表現を覚えられた」という項目について、「つぶやき」練習と「リズム」練習を比較した。その結果、「つぶやき」練習の方が「リズム」練習よりも、「英語の表現を覚えられた」と回答する学生の割合が僅か

ながら多く、その両者間の差は有意であった。

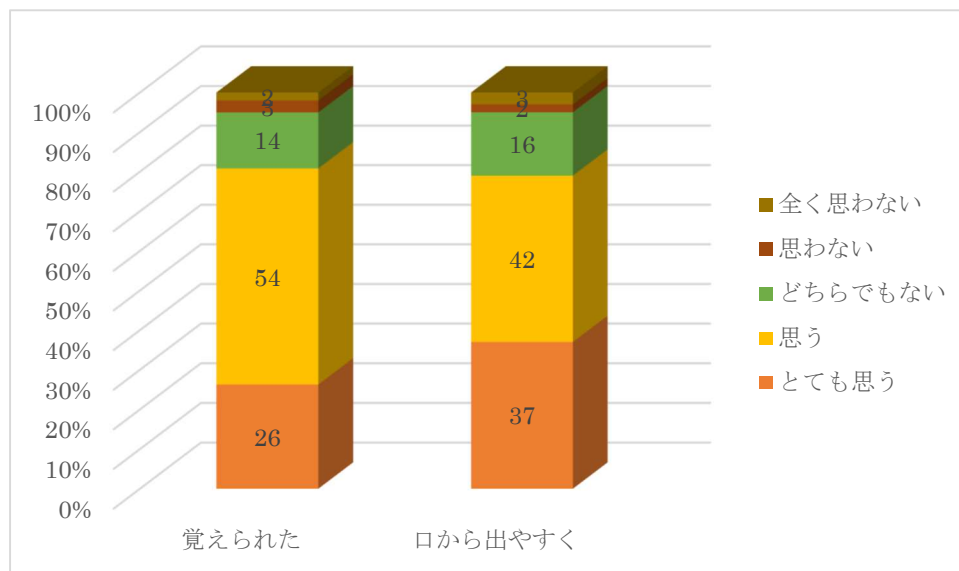
「つぶやき」練習において、「英語の表現が覚えられた」という項目と「英語が口から出やすくなった」という項目の平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみると、有意差が見られた( $t(241) = 2.98, p < .05$ )。同じく、優位水準1%の両側検定でも検討してみたところ、こちらにおいても有意差が認められた( $t(241) = 2.98, p < .01$ )。

赤ちゃんは母親をはじめ周りの大人たちの発話を数多く聞くことにより、言葉が話せるようになるといった話を耳にすることがある。その視点からすれば、ネイティブ・レベルの英語を聞く機会が多い「つぶやき」練習は理にかなった練習法だと言える。英語を「口から発する」ためには、まず、「英語の表現を覚える」必要がある。覚えるためには、まずはネイティブの英語を何度も耳にしながら、「つぶやき」練習を行い、「英語の表現を覚える」のが良いと言えるのかもしれない。最初の段階では「つぶやき」練習を行い、次に「リズム」練習を採り入れていった今回の試みは、妥当な流れであったと言えそうである。

### 3.4 「リズム」練習について

最後に、「リズム」練習における、「英語の表現が覚えられた」という項目と、「英語が口から出やすくなった」という項目の2つに対する調査結果を検討してみたい。

図 12 「リズム」練習について(「覚えられた」vs.「口から出やすくなった」)



Note. 「リズム」練習における、「英語の表現が覚えられた」という項目と、「英語が口から出やすくなった」という項目に対する調査結果。縦軸は、下より「とても思う」「思う」「どちらでもない」「思わない」「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図12を見ると、「英語が口から出やすくなった」という項目においての方が、「英語の表現が覚えられた」という項目においてよりも、「とても思う」と答えている学生の割合が高いことが分かる(37% > 26%)。「どちらでもない」と答えている学生の割合の違いは僅かであり(「英語が口から出やすくなった」、「英語の表現が覚えられた」の順に、16%、14%)、「思わない」・「全く思わない」と答えている学生の割合も、ほぼ変わらない(「英語が口から出やすくなった」、「英語の表現が覚えられた」の順に、2% + 3% = 5%、3% + 2% = 5%)。

「リズム」練習における、「英語の表現が覚えられた」という項目と「英語が口から出やすくなった」という項目の平均値の差を優位水準 5%の両側検定により検討してみると、有意差は見られなかった( $t(241) = -0.71, n.s.$ )。

「リズム」練習については、そもそも、「英語を発する」ことを念頭においた練習であるため(2.2参照)「英語を口から出やすく」する効果があるのはもちろん、「英語の表現を覚える」際にも効果を期待できる練習方法だと言えるだろう。2.2で紹介した小学生の例は、この「どちらにも効果がある」といった「リズム」練習の特徴ゆえの事実であったと言えるのかもしれない。

#### 4. おわりに

今回の試みでは、「英語での発話」を促すための基礎練習とも言える、「つぶやき」練習と「リズム」練習について見てきた。先述のとおり、「つぶやき」練習にしても、「リズム」練習にしても、筆者の経験に基づき、数年前より実施している練習方法である(2.1、2.2参照)。

今回の試みにより、どちらの練習法も、「英語の表現を覚える」際にも「英語を口から発する」際にも、かなり高い効果が期待されることが分かった(3.1～3.4参照)。ただ、「英語の表現が覚えられた」というアンケート項目においては、「つぶやき」練習の方が「リズム」練習よりも、「英語の表現が覚えられた」と回答する学生の割合が僅かに高く、それぞれの平均値の差を優位水準 5%の両側検定により検討してみると、有意差が認められた(3.1参照)。

大学生ともなれば、自分にふさわしい方法を自ら選んで(教員が強要するのではなく)実施していくというのが良いのかもしれない。学生たちが自分に合った方法を自ら選択できるように、授業では、様々な活動や練習法を実体験できる機会を設けてやるのが良いと言えるのかもしれない。

これからも、学生たちの意見にも耳を傾けながら、学生たちが「英語が使える」・「英語で発信できる」ようになるための手助けをしていけたらと思う。

#### 参考文献

- Donaldson, Chris (2018) *Healthy English 2<sup>nd</sup> Edition*. Language Point.  
 角山照彦他(2015)『Modern Family <First Season> — Episodes 1-5』松柏社

協同学習法ワークショップ<Basic> 2009年改訂版 日本協同教育学会.

堀内ちとせ(2017)「英語での発話を促すために(2)」*Language & Literature* (Japan) 第26号 6-20. 愛知淑徳大学大学院英文学会.

安永悟(2012)『活動性を高める授業づくり—協同学習のすすめ—』医学書院.